

明恵『華嚴信種義』にみる「凡夫の信」について

米澤実江子

はじめに

明恵（一一七三—一二三三）は法然（一一三三—一二二二）の『選択集』を批判し（『摧邪輪』・『莊嚴記』）、その後、李通玄の著作を披閲（一二二〇）した⁽¹⁾後、『解脱門義』（一二二〇）ならびに『華嚴信種義』（信種義 一二二二）を著した。前者は修行者を対象に「五十二位等を経歷する方法」を述べ、後者は在家者を対象として「信を起す方法」を述べたとする⁽²⁾。本稿では、明恵が凡夫をどのように理解し、凡夫が起す「信」をどのように捉えていたのかについて、『信種義』における「如来の十徳」（十徳）と「十甚深義」（十深）の関連を中心に検討する。

一 明恵の凡夫観

一・一 『摧邪輪』（一二二二）では「菩提心は各位に随って浅深不同であり多種である」とした上で、善導が心を向けるのは縁発心を取る未入位の凡夫であるとする⁽³⁾。また『莊嚴

記」（一二二三）では「善導の『観経疏』撰述意図は、取相の愚かな凡夫に対して、具体的な仏と浄土を示すことで仏道へ導くためである⁽⁴⁾」という理解を示す。『摧邪輪』では、仏道について「全ての仏が発菩提心を勧める理由は、仏の正覚は菩提心によって成されるからであり、仏道として異なることはなく、粗野な人々も発心不退なら速やかに仏果を証する⁽⁵⁾」として、仏の発心から成仏までの過程を、専修念仏者（未入位の凡夫・田夫野客等の修道の根本とすべきことを示す。

一・二 『三時三宝礼釈』（一二二五）⁽⁷⁾では、はじめに自行としての礼拝の方法を示し、「既に自行のある人に強制するものではない⁽⁹⁾」と述べ、自行を簡略化した易行を在家のための礼拝の方法として示す⁽¹⁰⁾。また「問者（在家）のように志ある者に、勤行可能な一行がある」として、「志を持ち、栗柿でもまず三宝に供えること」とし、明恵自身も幼少の頃に始めたとして、年少者にも可能な易行としての礼拝行を示す⁽¹¹⁾。

明恵『華嚴信種義』にみる「凡夫の信」について（米澤）

一・三「三時三宝礼功德義」⁽¹²⁾（二二六）⁽¹³⁾では、『弥勒菩薩所問本願經』⁽¹⁴⁾を援用して、弥勒菩薩は多くの布施行ではなく、礼敬の一行によって仏果を得たことを示し、信心決定して礼拝を行う場合は、余行を行わなくても遠近に利益を得ることに、礼敬に励み功德を積むことを述べる。

これらの内容から、明恵は、田夫野客を含む在俗者・専修念仏者等を、成仏道の過程における自明の存在である未入位・取相・愚縛等の凡夫とした上で、易行を複雑な内容の簡略化として示していることがわかる。明恵自身は未成仏の修行者として愚僧（上位者に対して凡夫）と自称しながら、出家修行者として在俗等の凡夫とは同じ地平に立っていないことを示していると考えられる。

二 『信種義』にみる凡夫観

『信種義』は、賀茂久継⁽¹⁶⁾の請いに応じて、前年に著した『解脱門義』における「信位」の段を基に撰述した。「信位」の段は、李通玄『新華嚴經論』（明恵は志寧編集『華嚴經合論』に依る）の「十徳」と、法蔵『探玄記』の「十深」を中心に展開する。『解脱門義』が修行者の信位の内容を明らかにすることに對し、『信種義』は、未入位の凡夫（在家者）を仏道に導くために、「信」をどのように起こし、また深まるかについて述べ、「総」・「別」・「問答」⁽¹⁸⁾からなる。

二・一 「十徳」と「十深」

李通玄は「十徳」について「文殊は信心の者の信解を増広させるために、仏の十種の徳を挙げて称讃する」とし、一々にその徳が称讃される理由を示す。法蔵は「十深」について、「信の中に解行を成すことを趣とす」とする。

『解脱門義』では、行者が「十徳」において起こした「信」によって得られる益⁽²¹⁾を示し、「十深」を「十信の菩薩の觀解の深玄」⁽²²⁾として、行者が信によって起こす智慧が甚深であると述べた上で、それぞれの前後の関連については言及せず、両者の会通を行者に委ねる。

『信種義』では、「十深」を「十徳」の内容が甚深であるとして、各「十徳」に對應させ、それぞれの徳に對して起こした「信」が甚深の内容によって深固になるとする。次に「第九」を挙げて、「十徳」と「十深」の相順關係を考察する。

《第九、如来苦行精進徳》

『解脱門義』では、「行者はこの徳を信じることで、勇猛精進して不退となる」とする。⁽²⁶⁾『信種義』では、「第八、如来智恵方便徳」の「如来の智慧方便を深く信じて余果を求めず、滯ることがなければ必ず仏となる」⁽²⁷⁾に對して、「取相の凡夫は、大いなる智慧をどのようにして憑みにするのか」と問い、「一乗教の仏智は、平等性智と相應する大慈大悲が欠けることはない」として、仏の徳は一切衆生を平等に救済する

旨を述べて、『解脫門義』の内容を以て答えとする。

『信種義』では、「第二徳」以下「第八徳」までは、「十徳」と「十深」を一对一の対応関係で示し、ともに前の内容について凡夫の立場から設問すること、後の内容を起す「相順」によって展開し、当該の『解脫門義』の内容を踏まえて答とし、「十深」が示すそれぞれの徳の深い内容（甚深）によって「信」が深固になるとする。しかし、「第九、一乗甚深」では、第九徳以外の徳との関連も示す。

《第九、一乗甚深》

『解脫門義』では、「諸仏の因果は皆同じであるが、衆生の感見に随つて仏法に差別がある」とする。『信種義』では、前の「第八、助道甚深」の「智慧を正とし戒定等を助とし、正助相資して必ず仏果を成す」⁽³⁰⁾に対して、「同一仏果を成すにも拘らず、なぜ諸仏に違いがあるのか」と問い、「種々の差別は衆生の機感に随う。諸仏に優劣はない」⁽³¹⁾として、『解脫門義』の内容に順じて答え、続けて次のような展開を示す。

・「第四、如来為説深法徳」に「第九、一乗甚深」を撰する。
・「第七、正行甚深（第六、正教甚深」に示す⁽³²⁾」に「第九、苦行精進徳」を撰する。

とした上で、「第四、説法甚深」・「第六、正教甚深」・「第九、一乗甚深」等にとの様な異なりがあるのか」と問い、

「説法甚深」は権実の法を説く。横遍が深。一乗を兼ねて横に説きつくす／「正教甚深」は直ちに正教を出す。教体が深／「一乗甚深」は究竟の理を顕わす。堅極が深。実機に授けて堅に極める」と答え、「如来の諸説は、全て、行者に苦行精進して仏果に証入させるためである」⁽³³⁾とする。すなわち、「第九、一乗甚深」では、仏は説法（第四、如来為説深法徳／説法甚深）によって教え（第六、正教甚深）を示し、行者は教えに示された正行（第七、正行甚深）を修し極める（第九、苦行精進徳）ことで一乗の仏果を得る（第九、一乗甚深）とする理解を示すものと考えられる。

このように、「第九、一乗甚深」において一对一の対応関係を離れ、他の徳との関連を示すことは、「第九徳」のみ因である苦行精進が信の対象であることで、因である苦行が仏の多様な果徳に裏付けられていることを示し、苦行に対して凡夫に信を生じさせ、維持・精進させ、苦行から退転させないようにする意図があったと考えられる。

二・二 随文就義釈

明恵は、『摧邪輪』において「教えに異なりがあつても、対象に相応する内容に勝劣はない」⁽³⁴⁾とし、『莊嚴記』では「法然は釈文の方軌を理解していない」⁽³⁵⁾として『選択集』を批判する。また、『摧邪輪』では「我々は仏法に出会い発心

をしても不退を得ることは難しい」と、現実の在り方を述べながら、釈尊の教えに背かないことを強調する⁽³⁶⁾。この時点での明恵は、凡夫の在りようを、教文のとおりを理解することを前提とし、成仏道の一過程として捉え、その対応には、一つの教え（文言）を簡易に説くことで事足りていたと考えられ、対象を凡夫のみに限定した解釈を示すまでには到っていない⁽³⁷⁾と考えられる。

『信種義』では「宗家に釈文の方軌有り。随文就義釈と名づく。『信種義』は就義釈である⁽³⁸⁾」とする。この「随文就義釈」について『聞集記』では「随文は文面に任せて解釈をし、就義は文面を離れて内容が示す意図を探って解釈をする⁽³⁹⁾」としている。明恵が「『信種義』は就義釈である」とするのは、修行者を対象とする『解脱門義』の「信位の段」を、凡夫を対象とした『信種義』として著す時、「十徳」を『解脱門義』と同様に信の対象とした上で、未入位の凡夫のための説明を施し、「十深」を『解脱門義』の「信によって起こされる行者の智慧が甚深である」とする内容とは異なり、「仏の十徳の内容が甚深である」とすることで凡夫の信が深められる、と解釈し直した点にあると考えられる。このことは、凡夫にとって起し難く維持し難い「信」を、如何に生じさせ、如何に退転させないように導くか、を示すためであったと考えられる。

『信種義』において「随文就義釈」を用いたことは、『選択集』批判を通して深く接することとなった善導の『観経疏』の撰述態度を「未入位・取相の凡夫を対象として経典を解釈した」と理解したことが影響したものと考えられる。

まとめ

明恵が捉える凡夫の在りようは、一貫して、流転から成仏に到る過程内の、未入位・取相・愚縛等の存在であり、そのような凡夫が起こす信は、信位の修行者のように自ら深まるものではなく、仏の徳の甚深なる用らきによって深まるものとする理解であると考えられる。よって、行者を対象とした『解脱門義』では、李通玄の「十徳」と法蔵の「十深」を行者に会通すべきこととしながら、『信種義』では、明恵自らが「十徳」と「十深」を相順によって会通し説明したことは、信の対象は断絶して存在するのではなく、また「十徳」も「十深」もそれぞれに連続し、相互に関連し合い、段階を経て信が深まることを凡夫に示す意図の反映であると考えられる。

1 『華嚴仏光三昧観冥感伝』（高山寺典籍文書綜合調査団編『明恵上人資料』（東京大学出版会、一九七一—二〇〇〇、以下『明資』）四、二〇三頁下）。
2 『聞集記』（『金沢文庫研究』第

四号、六六頁)。両書は対象が異なるので、『信種義』を「単に『解脱門義』の要略とする」(島地大等『日本仏教教学史』(中山書房、一九七六)三八八頁) ことには再考を要すると考える。

3 鎌田茂雄・田中久夫編『鎌倉旧仏教』(岩波書店、一九七二)三二〇頁上一下。米澤実江子『摧邪輪』に見る明恵の平等観『福原隆善先生古稀記念論集 仏法僧論集』二、山喜房仏書林、二〇一三、八二八頁。

5 鎌田・田中一九七二、三二五頁下。6 鎌田・田中一九七二、三三三頁上。

7 在俗者・西方行者(『新版日蔵』七四、一六九頁下・一七二頁下)との十問答からなる。先行研究では「専修念仏の影響がある」他の指摘がある(石井教道『嚴密の始祖高弁』(『大正大学学報』第三号、一九二八)他)。

8 『仮名行状』(『明資』一、四六頁)、『明資』一、五〇頁。

9 『新版日蔵』七四、一六一頁上一下。10 『新版日蔵』七四、一七三頁上。

11 『新版日蔵』七四、一七三頁下—一七四頁上(第八問答)。

12 藤原孝道(一二六六—一二三七年。市古貞次他編『国書人名辞典』(岩波書店、一九九三)一九九六四、二一九頁)が見た「三宝礼拝」の瑞夢に対して「三宝礼拝」を行うことの功德を説き、六問答からなる。

13 『仮名行状』(『明資』一、五一—五二頁)。

14 『大正』十二、一八八頁下。15 『新版日蔵』七四、一八二頁下。

16 『賀茂社司(神主)久継』、賀茂能久(一一七一—一二三三年)第二子。

17 『信種義』(『明資』五、二六四頁)。

18 木村清孝「明恵における「信」の思想の一特質——金沢文庫本『華嚴信種義聞集記』を援用して——」(『金沢文庫研究』第二〇卷一〇号、一九七四)他参照。

19 『華嚴經合論』(『正新纂大日本統藏經』四、

一八三頁下—一八五頁上)。

20 『探玄記』(『大正』三五、一七六頁下)。明恵は建久年間には、既に「十深」について検討

(『仮名行状』(『明資』一、三三頁・四〇頁)。

21 『明資』五、一〇六一—一〇七頁。

22 『明資』五、一〇八頁。

23 『聴集記』(『金沢文庫研究』第四号、五頁)。

24 『明資』五、一〇九頁。

25 『華嚴信種義聞集記』(『聞集記』(金沢文庫編『金沢文庫資料全書』二、一九七五、二二八頁上)。

26 『明資』五、一〇七頁。

27 『明資』五、二六二頁。

28 『明資』五、二六二—二六三頁。

29 『明資』五、一〇九頁。

30 『明資』五、二六六頁。

31 『明資』五、二六七頁。

32 『明資』五、二六五頁。

33 『聞集記』(『金沢文庫資料全書』二、二五七頁下)。

34 鎌田・田中一九七二、三八五頁上。

35 『浄全』八、八〇〇頁下。

36 鎌田・田中一九七二、三三三頁上。

37 高橋弘次『続法然浄土教の諸問題』(山喜房仏書林、二〇〇五)一八一頁参照。

38 『信種義』(『明資』五、二六九頁)。

39 『金沢文庫資料全書』二、二六〇—二六一頁。

〈キーワード〉明恵、『信種義』、十徳、十甚深、凡夫、信、『解

脱門義』、李通玄、法蔵

(浄土宗総合研究所嘱託研究員・博士(文学))